# 民国初期における議会主義の生成と展開

## ――政党政治と政治統合 (3)――

鐙　屋　　一

### はじめに

民国初期の中国における最重要の政治的課題である国家建設と政治統合を達成する方法として当時提唱された政治論を議会主義の生成という観点から分析するのが本論の目的である。

民国初年は、過去の中国には存在しなかった「議会」、「選挙」、「政党」という近代政治制度の輸入に由来する概念で「政治」が語られるようになった時期である。本篇を含む一連の論考において、政党政治の展開過程において主要政党を組織した政治指導者の政治統合論の中から、中国の議会主義生成の基盤とその特徴の抽出を試みている。

すでに拙論において、進歩党結成の中核にあった梁啓超の国家建設論と政治統合論のうち、(1)社会有機体論、および(2)政治発展論の文脈におかれた共和政体論について検討したのち[1]、(3)中国の国家建設の方策として提言された「保育政策」の内容分析を行なったうえで、ステイト・ビルディングとネイション・ビルディングという政治統合の二大領域について考察し、(4)統治機構と(5)社会規範の視点から梁啓超の政治論の議会主義的な特徴の解明を試みた[2]。

「政治」に関する梁啓超の思考は、伝統的な王朝体制を近代国家へと変容させるための方途を中心にめぐらされている。伝統的な「分裂」に近代的な凝集力を如何に注入するか、近代社会の担い手を創出する社会規範である「無形の秩序」をいかに建設するのか、梁啓超がその国家建設方案の中で強調してみせた「政党政治」と「責任内閣」はいかに生みだされるのか。民国初年の梁啓超の関心は「政党」結成へむけて政治的な綱領へ収斂しつつあった。

本篇では、「進歩党」の結成とその展開過程を分析する前提となる、民国初年の重要な問題について、梁啓超の言動を手がかりに描出する。

### 第１章　梁啓超と進歩党（その３）

#### 第２節　進歩党の結成と政党政治

##### (1)　梁啓超の袁世凱への支持

梁啓超は、1913年５月進歩党を結成し、９月には熊希齢を首班とする進歩党内閣に司法総長として参加、袁世凱大総統への協力と支持を明確にしてゆく。「第二革命」の収束後、早くも1913年10

あぶみやはじめ：人文学部言語文化学科　教授

月4日、憲法会議は大総統選挙法を公布し、6日「公民団」を自称する群衆に議場を包囲される中で議会は3回の投票を経て、袁世凱は初代正式大総統に選出され、その地歩を固めた。大総統選挙法公布直後、賛否騒然たる世論に対して、司法総長梁啓超の見解は次のとおりであった。

アメリカの大統領選挙法は、アメリカの「事勢」に適応したものであり、中国のそれはアメリカの選挙法とは全く反対の性格を有する。「わが国の今度公布した大総統選挙法もまたわが国現在の事勢が産出したものである（傍点は引用者）」。その前提は2つあり、ひとつは「わが国には現在、いわゆる政党というものがなく、政党があったとしてもその能力は政治をするほど十分はない」こと。アメリカでは政党が大統領候補者を推薦するが、「中国の政党はこの任に堪えない。よって現在の大総統がこの煩雑な任務をになうしかないのである」。そしてふたつめは、「わが国は現在、軍隊に依拠し国家を維持しており、全国の軍隊が平素から敬愛している人でなければ、軍隊を統制することはできない」。そして「これらはみな中国の現在の事勢が要求するところである」と梁は述べる[3]。

ここで「現在の大総統」といい、「全国の軍隊が平素から敬愛する人」というのは、いうまでもなく、袁世凱大総統にほかならない。梁の袁支持の理由は、政党の無能力と軍隊のコントロールとの2つであるが、その基礎にあるのは現在の「事勢」の要求ということ、すなわち中国の現実が袁世凱を求めているという判断である。

ところで、われわれの関心である政治統合の重要な領域である統治機構という観点からかえりみれば、梁啓超の構想する統治機構においては、袁世凱の具体的な位置付けは曖昧なままに残され、わずかに現実に対する関心が生じたときに大総統に対する考慮がなされていたにすぎず、梁の統治機構論からは袁世凱支持の論理は生じない。梁の袁世凱支持の根拠は、論理ではなく、むしろ心情と事実のうちに求められる。

心情という点でいえば、梁啓超の提唱した「保育政策」とその遂行にあたる「強力な政府」の立論の過程において、たえず憧憬の対象となっていた人物がひとりいたということに着目しなければならない。それは第26代アメリカ大統領セオドア・ルーズヴェルト（在任1901～1909年）である。梁はいう、100年前の建国時のアメリカは中国のモデルにならないだけでなく、現在のアメリカでさえ分権制は過去の理想となり、「ルーズヴェルト氏の唱える新国家主義[4]」が登場している。「ルーズヴェルトは演説で、常に『善にして強』Good and Strong という語を聴衆に語っていた。わたしが説く強というのもまた、善にして強ということを指して言っているのである[5]」と。そしてまた、保育すれば人口が増えるけれども、欧米では刹那的享楽主義（「現在快楽主義」）のため、将来を考えなくなり、人口は減少してしまったとして、「アメリカでは日に日に移民は増えているが、固有の民は日に日に減少している。そのためルーズヴェルトは新人口論を唱え、マルサスの説に反対し、救済の方法を考えたのである[6]」と梁は述べている。

例をあげればきりがないが、このように梁は保育と集権のリーダー、ルーズヴェルトを引照しつつ「保育政策」と「強力な政府」の必要を論証していたのである。梁は「強力な政府」を、論理の上では大総統ではなく内閣に、とくに政党内閣に措定してゆこうとするが、心情の上では、グッド・

アンド・ストロングをモットーとするルーズヴェルトに傾いていた。そしてルーズヴェルトのような人物を中国に求めるとすれば、まず想起されるのが、ストロング・マン袁世凱であろう。既にみたように、政党の無力を補完し、軍隊を統制する能力をもった人物として袁世凱を支持したように、梁には心情的に袁世凱を支持する理由があったといえる。

「現実主義的思考方式」が梁啓超の清末改革論の特徴であることは既に指摘されているが(7)、梁の袁世凱支持には、「今日の事勢の必要」に対応するという政治的リアリズムが強い動機になっていたことは否定できない。梁の袁世凱との関係の事実を辿ってみると、梁と袁とはかなりの頻度で交信を続けていたことがわかる。

1911年11月16日（陽暦、以下同じ）、袁世凱を首班とする清朝の内閣が成立した。その10日前に梁は日本を発ち、9日に大連へ到着した。日本を離れる3日前、徐君勉に宛てた書簡で、袁世凱への支持が表明される。

「今度の政治革命の成功はまったく意外なことでした。乱世を回復するという大仕事は、旦夕のうちにできるものではありませんし、自ら敵の前におもむかなければ功を奏することもむずかしいでしょう。幸いなことに資政院が実権を握っており、議員の大半は皆同志ですから、今度の私の旅行ではきっと彼らの手を借りることになるでしょう。袁世凱と協力し、革命派をなだめ、満州政府にせまって、漢人にしたがわせる〔原文は、和袁、慰革、逼満、服漢〕、大方針はこの8文字にほかなりません。このことを各同志に伝えるようお願いします(8)」。

この書簡から梁が袁世凱と「協力する」という「大方針」を打ち出していること、また資政院の内部に梁の「同志」がいることがわかる。資政院は清朝の立憲体制化の諸措置のひとつとして1910年10月に正式に設置された中央諮議機関であり、議員は全200人中、欽選議員の100人に対して民選議員も100人で、各省の諮議局から選出されていた。地方諮議局が立憲派人士を中心に成立していたとすれば、資政院の「議員の大半」が皆、立憲派の巨頭梁啓超の支持者であったとしても不思議ではない。さらにこの書簡からは、梁が内閣の内部の満人貴族とも結託していたらしい様子がうかがえる。10月29日の徐君勉宛書簡に次のようにある。「ここ2年間、朝廷貴族の中でわが党と共同して事にあたるのは、濤と洵のふたりだけでした。しかし洵はまことに役に立たず、役に立つのは濤ひとりだけです(9)」。濤とは軍事上の全権を握る載濤のことであり、洵とは海軍部尚書載洵のことである。

さて、梁と袁との関係に戻れば、11月10日奉天に熊希齢を訪ねるため大連を出発する直前、梁が愛娘に宛てた書簡では、「私はどんなに危険であってもきっと都に行きます。都でもし変事があれば、どの国の大使館でも暫時逗留することができますから、とくに心配しないでください。都にいったあとは、もし冢骨〔袁世凱を指す〕にまだその気があるなら、共に大難を平定することができるでしょうし、そうでなかったら取って代えればよいのです。どうするかは私がどうしたいかにかかっています(10)」と述べ、袁世凱との協力の可能性（および袁を排除する可能性）があることを示唆している。

梁は袁との協力の必要性を次のようにも述べている。すなわち、革命軍の成功は兵力によるもの

が10分の３、言論の鼓吹によるものが10分の７である。一方、袁は理財治兵に長じており、自分は言論によって国民の心理を変化させるのに長じている。したがって、袁世凱と任務を分担して努力しなければならない[11]、と。

11月13日、袁世凱は圧倒的な軍事的示威のもとに北京に帰り、11月16日袁を内閣総理大臣とする内閣を成立させるや、既に日本に帰っていた梁啓超を司法部の副大臣に指名した。袁の再三の督促にもかかわらず、意外にも梁は就任を辞退し続けた。北京の羅癭公宛書簡で、辞退の理由を次のように述べている。「項城〔袁世凱〕がもしわたしと誠意をもって手を握れば天下のために大いに役立つだろうとわたしは信じています。しかしながら今全国がきわめて混乱しているときに、過激派が最も嫌っているのは、私たちふたりです。もし突然協力してひとつになってしまったら、すべての攻撃の的になってしまい、名目と異なり、実際は〔任務遂行に〕ひどい妨げとなります[12]」。すなわち、袁と協力した場合、革命派の攻撃が立憲化の進行を妨害するであろうことを梁は危惧していると理解してよい。

また、梁が袁世凱内閣への就任を辞退するにいたった背景として、あくまで君主立憲制を主張する一方で、南北和議の経過から袁世凱による清廷廃位を予想していた梁は、袁に対し不信感を持っていたと推測される。

羅癭公は梁への書簡で袁について、「外国人は袁が総統になるだろうと言っていますが、昨日袁世凱と会ったときには、非常にのんびりした様子で、すぐさま保証してくれましたが、本心はどうなのかわかりません[13]」と報告している。1911年末から1912年２月にかけて、盛先覚が上海の章炳麟・熊希齢・景耀月などについて、羅癭公・藍公武が北京の袁世凱について、張漢章・譚奎昌が山東省の諮議局について、麦孺博が広東の岑春煊について、梁に対してたびたびレポートを提出している[14]。確かに梁は袁世凱の政治力を評価し、袁との協力を考えてはいたが、一方、梁は全国の主要な政治勢力に関する情報収集に乗り出し、袁世凱以外の政治勢力との協力関係樹立を模索していたと推測される。「北京の一般輿論は袁に不満を持ち、康〔有為〕・梁〔啓超〕内閣を期待して、袁を継ぐのは康でなければだめだと言っている[15]」という羅癭公の報告はその傍証として興味深い。

袁世凱は民国成立以後も、梁士詒を通して電報・書簡によって梁を懐柔しようとしている。自陣営に梁を組み込むことによって袁が得る利益については、藍公武の推測が正鵠を射ていると思われる。「〔袁世凱の〕意図を推測しますと、両先生〔康と梁〕の就任を〔袁が〕希望するのには、２つの理由があります。ひとつは、両先生の力で広く人材を集めて、輿論を挽回しようとすること。もうひとつは、両先生が華僑と連絡して財政を整理することを望むことです[16]」と藍は述べている。すなわち、世論の慰撫と、華僑資金の獲得が袁の目的であると考えてよいだろう。

以上、袁と梁との頻繁な交信の存在が、むろんその離合の微妙さと人間関係交錯の複雑さのため、これが梁の袁支持の理由であると速断することはできないにせよ、梁が袁を支持してゆく背景として理解しておかねばならない。

梁と袁との「協力」関係の模索、袁の梁に対する懐柔の決定的証拠は、袁の梁に対する資金援助

に見出しうる。1912年11月1日、梁は娘宛の書簡で次のように述べた。「項城〔袁世凱〕は月に3、4千元を送ってきました。これを受けとったのは、ひとつには、裏切らないと安心させ、彼の疑いを回避するためですし、またひとつには費用が実に膨大で、これがないとやりくりできないからです。〔中略〕両党〔民主党と共和党〕の合併はきっと成功します。各新聞が成功しないだろうと言っているのは、敵党に疑われないようにするためです。党が成立したら、私に20万を援助してもよいと項城はいいますが、私は50万はないと運営できないと考えていますので、いずれはまた交渉してみましょう[17]」。

およそ半年後、民主党と共和党、そして統一党との合併が成立し、進歩党が結成される。進歩党の結成においては袁世凱の資金援助があったことが、判明する。この結党資金と月額3千元の梁個人への資金援助は、袁と梁との結託、あるいは袁の梁に対する懐柔の態様を物語っている。蛇足ながら、梁のこの書簡には梁家がいかに支出が多いかを娘に説明するくだりがあり、政党指導者の家計を知る点では興味深い。

最後に、梁と袁との関係を考える上で、共通の敵、同盟会あるいは革命派への対抗の必要があったことを指摘しなければならない。中国各地から梁のもとへ届けられるレポートは、単なる報告だけでなく、立憲派人士の梁に対する提言や要望も数多く含まれている。そのひとつ、張嘉森が1912年2月12日に梁になした提言は注目に値する。張は次のように述べる。「ひそかに思いますに、今後天下を二分するのは、袁と孫の両党でしょう。わが党がこの時期に対処する方法は2つあります。超然と独立し、別に政党をたて、天下と見解を共にするのがひとつ。そして両党のひとつと提携し、われわれの考えていることを実行してゆくのがもうひとつです。〔中略〕当面は、両派のどちらかを選んで提携するより他に方法はありません。この両者のうち、比較的建設の任務にふさわしいのは、実は北方です。したがいましてわたくしが思いますには、採るべき手段は、聯袁だけでしょう[18]」。張嘉森の提言は、まず状況把握として、袁世凱と孫文の2勢力が中国を2分すること、次に立憲派はいずれかと提携する必要があること、そして妥当なのは袁世凱と提携することであった。さらに張の展望では、将来各省に政党支部を展開することで袁を制御できるであろうことが陳述されている。

約10日後の2月23日、梁は袁世凱宛の書簡で大要次のように述べた。現在政界に出没する人間は次の3派に分けることができる。「旧官僚派」・「旧立憲派」・「旧革命派」がそれである。「旧官僚派」には、卑賤で狡猾な者もいるが、行政部には経験の豊富な人物もいる。「旧革命派」は今後2派に分かれ、「旧革命党」中の「政治思想ある者」は、「旧立憲党」と合併することができるが、「衝動的に行動する者」は、われわれとは合併できないし、ただ破壊ができるだけだから、いずれ勢力を得られなくなるだろう[19]と。当時日本にいた梁啓超には、中国の外部にいたがゆえによりよく国内の情勢が見えていたことであろう。「旧革命党」について呈示した見解は、一年半後の「第二革命」を見通したように読める。これが袁世凱宛の書簡であることを考えれば、「旧官僚派」との提携が、すなわち袁世凱との提携の可能性が、勢力分析を経た上で示唆されていると看做すべきである。

1913年4月14日には、梁は、「官僚派」を「腐敗派」、「革命派」を「乱暴派」と呼びつつ、同様の論点をより明確にした演説を行なっている。

「臨時政府は既に国民の承認を得て成立しましたので、法律上は当然国家機関であると承認しなければなりません。われわれは、ただ厳重に監督しなければならぬだけで、必ずしもみだりに敵意をもって、対抗することはありません。わが党は、臨時政府の成立については、何ひとつ満足することはできませんが、しかし、この生存するか滅亡するかの境目にありましては、政府があるのは、政府がないよりましであると思います。しかし、乱暴派の手段では、結局国家を無政府にしてしまうことになるでしょう。わが党はこのことを恐れているのです。したがいまして、満足できない政府については、やはり維持するようにつとめますが、正式政府の成立を待って、徐々に改造を試みてゆきましょう[20]」。

ここにみるように、臨時政府には満足できないが、「乱暴派」の方がより危険であり、「乱暴派」に先ず対抗するために、臨時政府に対しては監督を強化しつつ、維持するようにするという方策が提起されている。むろん臨時政府とは臨時大総統袁世凱の政府を指している。監督を強化するという条件付きではあるが、「乱暴派」との対抗の必要上、梁は法的存在としての政府を擁護するという限定のうえで、袁世凱を支持していると見てよい[21]。

以上みてきように、梁と袁との関係は、事実において存在していた。それは、立憲君主制成立の可能性を袁の力に賭ける梁のかすかな期待であったり、また自己の勢力の安定を求める袁の梁に対する地位と資金とによる懐柔でもあり、そして、共通の敵との対抗上の必要からの梁の袁に対する限定的な支持であった。さらに、ルーズヴェルトの姿を袁に投影してみたいという梁の心情も忘れてはならない。かくして、論理において見出せぬ梁の袁への支持は、心情と事実とにおいて、ある程度その根拠を見出すことができよう。

### (2) 進歩党の結成

進歩党は、民主党、共和党、統一党の合併によって成立した。民国初期の政党政治を考える上でこの合併という結党方式は重要であるが、これについては後に触れることにして、いましばらく進歩党に結集してくる主な人物の顔触れを眺めておきたい[22]。

進歩党を構成した3党のうち、最も結成が早かったのは統一党である。統一党は1912年1月、中華民国連合会（章炳麟と同盟会光復会系）と預備立憲公会（張騫と江蘇・浙江・福建の立憲派人士）とが合併して成立した。理事は、章炳麟・程徳全・張騫・熊希齢の4人。同盟会を敵視する江浙の人々が接近し合併した地理的関係を紐帯として成立した政党である。湯化龍、林長民なども幹部に名を連ねている。

共和党は、この統一党と民社とが合併し、1912年5月に成立。もと憲友会系の小党、国民共進会（籍忠寅、黄遠生）、民国公会（浙江人士）、国民党（伍廷芳）を吸収した。民社は、黎元洪を中心にした湖北系の「同郷政団[23]」で、1912年1月に成立。幹部には、藍天蔚、孫武、張振武、張伯烈、寧調元、饒漢祥らがおり、湖北共進会のメンバーが中心になっていた。共和党は、理事長を同

盟会との対抗上勢力拡大のため合併したもので、自ら「国権党」と称し、「民権党」たる同盟会に対峙したが、合併直後、章炳麟が離脱し[24]、統一党との維持を宣言した（大部分の元統一党員は共和党籍をも保有したままであった）。

民主党は、憲友会系（南方）の共和建設討論会（湯化龍、林長民）を中軸に、同じく憲友会系（北方）の共和統一党（孫洪尹）および「北京の政団[25]」である共和倶進会、共和促進会、国民新政社を吸収して成立した[26]。いずれも康有為、梁啓超に共鳴する立憲派人士および諮議局議員を中心にしており、幹事長には湯化龍を任じ、林長民、孫洪尹が補佐し、梁啓超をリーダーと仰いでいた。国民党と共和党の２大政党台頭に応じて、キャスティング・ヴォートを握る第３党たることを自認していた。

統一・共和・民主の３党に共通する特徴は、中心人物の人脈・過去の履歴・基盤となる地縁によって結合した小政治結社が、合併によって成立していること、したがって、合併後にも合併前の人脈・履歴・地縁上の諸関係がもちこまれ、複数の党籍の保持が許されていたこと、そのために、合併の容易さと同程度に分裂もまた容易であったこと、などを挙げることができる。３党はいずれも上海で正式成立大会を挙行しているが、これは清朝に対する国会請願運動において、各省諮議局代表の結集地が上海であったことと関連しており、３党と旧立憲派との深い関係を反映したものとみることができる。

進歩党の結成は、清末立憲運動挫折以後分裂していた旧立憲派を結集させるという意味を持つ。そしてこの結集の中心となったのが梁啓超であった。旧立憲派結集の動向は既に1911年６月４日の憲友会の成立にみられる。このとき徐仏蘇は梁への書簡で次のように述べた。「この会〔憲友会〕の気勢はきわめて盛んです。３ヵ月のうちに各省に分会が成立するでしょうし、７、８省で盛んな勢力を占めれば、宣統５年の国会では、きっと大多数の議席を占めることでしょう」と[27]。旧立憲派統合の直接的な契機は、梁啓超の帰国である。梁啓超自身は、1912年１月には共和建設討論会に加入し、４月には会の名を付して「中国立国大方針商榷書」を発行し[28]、８月には民主党の指導者に推されている。梁は、1912年９月末に神戸を発ち、10月８日に天津に到着した。20日の北京入り以来各界の大歓迎を受けた梁は、その感激を次のように娘に語っている。「このところ受ける歓迎は、孫・黄〔の場合〕と比べて数倍である[29]」と。孫文・黄興の場合とは、1912年９月に袁世凱との会談のため北上したときのことをいう。梁はいう、「彼らが受けた歓迎の会は５、６ヶ所だけですが、私はもう10数ヶ所で歓迎されています。私の演説はそれほどいいものではありませんが、北京の人は初めて聞くよう〔な感激ぶり〕です。昨晩は総統府で歓迎会が開かれましたが、国務院の全員が出席してくれました[30]」。11月７日に天津へ戻る際、梁は在京12日間を回顧して、次のようにいう。「この12日間は、私ひとりが北京の中心でした。各人は皆私をとり囲み、まるで多くの星が北極星をとりまくようでした。なかでも最も喜んでくれたのは、昔日の立憲党です。旧立憲党は皆自分たちの主張が失敗したので意気阻喪していましたから、私が新聞界の歓迎会で演説すると、各人は勇気百倍〔に元気付けられたの〕でした[31]」。梁が歓待され、旧立憲派もまた梁のもとに結集してきたことの一端を示している。

共和党と民主党の提携計画は既に梁が帰国し天津に到着したとき形を成していた。「共和、民主両党の合併はすでにきまりました。黎〔元洪〕を総理にして、私は副総理になり、張〔騫〕・伍〔廷芳〕・那〔彦図〕は皆〔共和党の〕幹事を退きます。およそ1ヵ月のうちには（今はまだ秘密ですが）成立を発表します」と梁は10月11日に娘に語っている[32]。実際は1ヵ月では合併は完成せず、梁が共和党にも加入し、両党合併の気運を上昇させることが必要だった。

第1回の国会議員選挙は、宋教仁の率いる国民党が圧勝し、衆・参両議院をあわせて、国民党が392議席を獲得したのに対し、共和党が175、統一党が24、民主党が24の合計223議席を獲得したにとどまった[33]。梁は「わが党は敗れた」と落胆の辞を娘に送っている[34]。

1913年4月に正式国会が召集されるや、両院議長の選出が課題となり、3党の議会内部での合同が必要となった。かくして、参議院議長選では議長・副議長はそれぞれ張継・王正廷が選出され国民党が勝利したが、衆議院議長・副議長には湯化龍（民主党）・陳国祥（共和党）を選出するのに成功したのは、3党の協同活動の結果であったと推測される。

進歩党の正式成立大会は、1913年5月29日、北京で挙行された。理事長に黎元洪、理事に梁啓超、張騫、伍廷芳、孫武、那彦図、湯化龍、王賡、蒲殿俊、王印川が就任した。

進歩党の結成には袁世凱の資金援助があり、袁世凱を党首にするという意見もあったようだが、宋教仁暗殺事件で紛糾する世論を考慮し、黎元洪に落ち着いた[35]。黎元洪は副総統および湖北都督の要職にあり、実際の党務は梁啓超・湯化龍が主導権を握り、幹部人事も民主党員が多く要職を占めていた。「進歩党には民主と共和の2派があるが、共和派は絶対に消極的で、そのため該党はすでに民主派独占の舞台となっている[36]」と共和党員黄遠生が述べているように、人数では共和党が他を凌駕していたが、要職は民主党が占めることとなった。

合併の計画は早期から提示されながら、実現が半年以上も遅れた原因のひとつが、共和党と民主党との反目、とくに民主党内の湯化龍派と共和党内の孫武など民社派とが相互に仇敵視していたことにあった。進歩党結成後も、この元湖北諮議局議長と元湖北共進会の指導者との軋轢が燻ぶり続け、結成後ひと月にして進歩党は分裂を迎えた。6月22日、共和党内民社派の張伯烈ら40名は、①少数党の民主党が合併契約に背き、多数の役職を占めたこと、②共和党の少数者が出席した席上で合併が独断的に決議されたこと、③共和党は黎元洪と湖北支部に合併の電報を隠匿したことを理由に脱党を宣言し、新たに共和党を組織した[37]。

民社派離脱の真因としては、①民主党による進歩党独占、②共和党の資金4万元がすべて進歩党所有になったこと、③入閣の希望が民主党の台頭で絶たれてしまったことが考えられる[38]。また、民主党内の山西派も共和党との合併には反対し、離脱して別に結社を組織した[39]。進歩党は分裂によって約50議席を失い、大きな打撃を受け、結局6月27日の憲法起草委員会委員の選出では、国民党が28名、進歩党が19名、共和党が3名と国民党に過半数を占められ、7月2日の候補委員の選挙においても国民党が過半数を占めるなど[40]、進歩党はその結成の目的を達成することができず、進歩党の団結力も減少してゆくことになった。進歩党の優勢は、1913年7月の「第二革命」による国民党の弱体化を待たねばならないが、進歩党の政党としての機能も、1914年1月10日の総統命令

による議会の解散で消失してしまう。

### (3) 政治的近代化と政党の機能

梁啓超にとって政党とは、近代国家建設において非常に重要な機能を果たすものとして構想されていた。1912年4月の時点で「政党政治が確立しうるか否か、健全な政党が発生しうるか否かは実に国家の生死存亡を決定するのである[41]」と表明した梁は、帰国直後の10月22日、民主党の歓迎会の席上、「真正の政党」であるための基準を民主党員に示してみせた。次の6項がそれである。すなわち、①「政党には公共の目的がなければならない」こと。つまり公共の目的を私的目的より優先し、個人が私的目的を犠牲にして公的目的に服従すること。②「政党には闘争の決意がなければならない」こと。すなわち、人類が自然に対する闘争によって文明を築いたように、政党員は選挙戦において闘争することによって国家を進歩させることができるということ。③「政党は整然たる命令系統を持たねばならない」こと。すなわち、人間は頭脳が身体に命令して人格を統一するように、強力な政党であろうとするには、軍隊の精神を採用して整然たる規律を具えねばならないこと。④「政党は公正の手段をとらねばならない」こと。すなわち、演説、新聞論説、遊説など公正の手段をとるべきで、陰謀、詐術を用いてはならぬこと。⑤「政党には犠牲の精神がなければならないこと」。すなわち、大事をなすには小さな苦痛を耐えねばならないこと。⑥「政党には寛大な度量がなければならない」こと。すなわち、政党は他党に対して、破壊や嫉妬の心を持ってはならず、他党が発達し、ともに競争角逐することが政治を進歩させるということ[42]。この6項を概観すれば、「真正の政党」の規準としては正統的で特異なものではない。梁啓超は他にも政党の規準を幾組か述べているが[43]、いずれもここに挙げたものと大同小異である。しかしながら翻って考えれば、このような、政党について言わずもがなのことを再三強調しなければならなかった点に、民国初期中国における政党政治発展の未熟さを梁は知悉していたことを確認できるのではないだろうか。梁にとって政党の発展こそ、国家の発展にほかならなかった。政党こそ国家発展の原動力であった。ゆえに梁はいう、「中国は今日すでに共和国体・立憲政体となったからには、将来の政府の組織が総統制を採るにせよ、内閣制を採るにせよ、政党を政治の原動力の要素としなければならないのである[44]」と。そして、「わが国政党政治の前途」を悲観することこそが「利国の道具を覆国の触媒に変えてしまう[45]」ことだと考えるがゆえに、敢えて梁は政党の規準を強調しなければならなかったといえる。

梁の政党政治論において注目しておかねばならぬことは、その二大政党体制の主張と、政党政治に付与するエリート主義的含意である。

梁にとって政党内閣の長所は、その「強力さ」とともに、その「弾力性」にあった。「国利民福とはもともと多様なもので、その道は相反しつつ相成るのであり、例えば寒暑がどちらも生命に益し、季節の運動では功をなした者が退くようなものである。だから国に健全な二つの政党があれば、どちらの党の政策を行なわせても、必ず国家に利益をもたらすのである[46]」。したがって、「完全な政党政治を行おうとするには国中で、ふたつの大政党が対峙しているということが前提なのであ

る[47]」と梁は述べる。むろん、梁啓超は小党分裂の危険性と、反対党の存在を認める政治的寛容の必要を説いているのである。進歩党結成の中心となったのが梁啓超であったが、二党体制の主張は、梁啓超が進歩党結成を待望する根拠であった。第1回正式国会開催中の1913年4月14日、共和党理事長黎元洪および共和党の衆参両議員を前にして、梁啓超は次のように合併の必要を訴えた。

「今国中に本党〔共和党のこと。民主党の梁は2月24日には共和党にも加入している〕の他に、まだ3つの大政党があります。民主党と統一党は本党と主義が近いものであり、国民党は本党と主義がやや遠いものであります。本党の党員で、民主・統一の党籍を兼有するものも決してすくなくはありません。そして、これら3党の党綱およびその抱懐するところの政策には、大きな異同はございません。これらが3党にわかれておりますのは、ただ単に、偶然の事実にすぎず、他に理由があったわけではありません。そもそも政党政治というものは、二大政党が対峙するのを原則としております。3党が分立する理由がない以上、当然融合できるような機会がきっとあるはずです[48]」(傍線は引用者)。

梁にとって進歩党の結成による国民党との対峙が、二大政党体制であった。それは中国における政党政治の分極化を意味しており、このことは政権党たりえぬ小党分立による政策形成能力の喪失の危険[49]を排除するとともに、ファクショナリズムの克服とも関連している。梁は政党と朋党とを「政党は国家の目的によって結合するもの、朋党は個人の目的で結合するものである」と定義し、「国家に朋党があると、政界を暗くくもらせ、また民徳を離散させ、党の寿命は長くはなく、大抵は国とともに亡ぶか、先に自分が亡び、国がそれにつづくのである[50]」と朋党の、すなわちファクションの危険性を指摘している。

ハンチントンは、政党の発達は、党派主義・分極化・拡大化・制度化の4つの段階を経過すると考えている[51]。ここにいう分極化とは、革命、すなわち政治参加要求の爆発の後、政治的党派と新しい社会勢力とが組織的に結合された時に生ずると捉えている。

梁啓超の、朋党ではない「真正の政党」による二大政党体制の主張は、宋教仁・章士釗の二大政党体制の主張と同様に、政党発達の重要な一段階へと「離陸」しようとする努力の発現であると考えられる。現実にはそうはならなかったが、国民党と進歩党が新しい社会勢力の参加の要求を組織的に制御し誘導しえていたら、つまり二党体制が確立されていたなら、中国現代史ははるかに異なる様相を呈していたであろう。ともかく、二党体制の主張は政治参加の要求を徐々に拡大し安定させる第一歩であるはずであった。

そしてこの場合重要なのは、「二大政党体制は上から下へと築くことができる[52]」ということである。すなわち逆説的ではあるが、参加の制度化を促すはずの二大政党体制にはエリート主義の影がともなっている。

梁は国民とエリートとについて次のように述べている。

「民衆の性質からみて、多数の平凡善良なものは、つねに少数の優秀特異なものの指導を受けて変化する。したがって、いついかなる国でも、一国の気運を統制し左右するのは、つねに極少数の人士である。この極少数の人士が国家を前提として政治家の資格を具備し、つねに強大な政治的責

任感と極めて濃厚な政治的関心にもとづいて努力邁進することができれば、危機的な状況となっても、すべて維持でるのである[53]」。

梁は国民を保育の対象と考えていた。そして「保育政策」の推進主体は「強力な政府」であり、「強力な政府」とは政党内閣であった。梁の構想する政党はエリートの集団として国民を指導してゆくものであった。進歩党成立宣言からもこの点が確認できる。「およそ政党政治の発達した国では、必ず政党が国内の各種の勢力を集めてこれを代表する。政党以外に特別の勢力は存在しない。だから国民はつねに政党に付託する。政治の良否はただ政党のみがその功罪を専らにする[54]」。国家を形成してゆくのが少数のエリートであり、政党がエリートを吸収する装置であることと、国民全体の参加による民主共和制の発展とは梁の思考においては矛盾してはいない。「保育政策」という強力なリーダーシップが媒介することで参加の拡大が可能となる。梁にとってエリートは後見的政府の重要な担い手たちであった。そして「強力な政府」を獲得するための政党を組織した結果が進歩党であった。

梁は朋党の特徴として次の５つを挙げている。すなわち①人を結合の中心とし、主義を結合の中心としないこと、②敵党の存在を許さぬこと、③陰険悪辣な手段を用いて競争すること、④党内にもまた党があること、⑤雑然と集合するのが容易で、分散潰走するのも容易であること、である[55]。

ところで実際の進歩党は、②と③は微妙な問題であるが[56]、①④⑤の特徴は明白に具えていた。進歩党の分裂は党内党の反目対立が原因であり、結成には約半年を要したが、分裂の兆候は絶えず内在し、結成１ヵ月にして民社が離脱している。進歩党は独自の綱領を具備した組織であったが合併以前の人間関係はそのまま残存しており、民主・共和・統一の３党それぞれもまた合併によって成立しており、人脈・履歴・地縁的関係が払拭されていたわけでは決してない。合併を繰り返して成立した進歩党は、皮肉なことに、旧立憲派統合の中心であった梁啓超の目から見ても、それが朋党としての特徴を強く示す「政党」であったことは疑いない。かくして梁啓超は、1913年10月、大総統選挙法を支持する理由として、「わが国には現在、政党というものはない[57]」と述べねばならなかったわけである。

## むすびにかえて

民国初期の政党にとって、議席数の獲得は決定的に大きな意味をもつ。各党にとって議会内の議席数獲得のための競争は、自党の勢力と影響力の拡大にとって、最大の機会をもたらすものであった。ところが競争とは先ず選挙戦を意味するが、民初において挙行された全国的選挙はわずか1回にすぎず、しかもその結果は臨時参議院で最大の議席を有する（選挙戦を前にあらかじめ合併拡大をしていた）党が、正式国会でも最大の議席を有しうることを確認しただけにすぎなかった。宋や梁のように自党が政権を取らずとも、他党が組閣するのを承認するという理性的な人々よりも、民社の一部にみられたように、入閣することが政党加入の大きな誘因であるような人々がむしろ多かっ

たろうことは容易に想像しうる。選挙に代わる議席獲得の方法は、既存議院を多く自党へと組み込むこと、すなわち跨党（複数の党籍を兼有すること）がそれであり、跨党の最大規模のものが既成政党の合併である。政党が独自な綱領と政策体系を持ち、その実行を目的とする結社であるとすれば、跨党や合併を許すような政党は、綱領や政策の明確さ・独自性を喪失してゆくことになるし、このような政党が次の選挙戦を勝ち抜く保障はなく、絶えず分裂の種子を培うことにもなる。民初において「政党政治」というものが、その活動領域の主要部分である議席数拡大のための合併を意味するとすれば、それは政党発展の初期段階、ハンチントンのいう党派主義の段階にあったことを示しているということができよう。

［註］

（1）　拙稿「民国初期における議会主義の生成と展開――政党政治と政治統合(1)」『目白大学人文学部紀要［言語文化篇］』第7号、2001年1月を参照。
（2）　拙稿「民国初期における議会主義の生成と展開――政党政治と政治統合(2)」『目白大学人文学部紀要［言語文化篇］』第8号、2002年1月を参照。
（3）　梁啓超「読中華民国大総統選挙法」『飲冰室文集』文集之三十、58-59頁。
（4）　梁啓超「中国立国大方針」『飲冰室文集』文集之二十八、52-53頁。
（5）　梁啓超「中国立国大方針」同上、52-53頁。
（6）　梁啓超「中国道徳大原」『庸言』第1巻第2号、6頁。
（7）　例えば、横山英「脱出への苦悩――梁啓超とその時代」『広島大学文学部紀要』31-2、1972年、70-71頁。
（8）　梁啓超「与勉兄書」丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』上海人民出版社、1983年、558頁
（9）　梁啓超「致雪公書」丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』同上、553頁
（10）　梁啓超「与嫻児書」丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』同上、559頁。尚、丁文江氏によれば、「冢骨」は、曹操が袁超を「冢中骨枯（無用の人物）」だといさめたことを踏まえて袁世凱を指しているらしい（丁文江、同上、558頁、脚注）。
（11）　「梁啓超復楊度親筆信」丁文江、同上、570頁。
（12）　「梁啓超復楊度親筆信」丁文江、同上、569頁。
（13）　羅瘿公「致任公先生書」丁文江、同上、568頁。
（14）　丁文江、同上、570-591頁。
（15）　羅瘿公「致任公先生書」丁文江、同上、576頁。
（16）　藍公武「致南海任公先生書」丁文江、同上、579頁。
（17）　梁啓超「与嫻児書」丁文江、同上、658頁。
（18）　張嘉森「致任公先生書」丁文江、同上、600頁。
（19）　梁啓超「致袁項城書」丁文江、同上、617頁。
（20）　梁啓超「共和党之地位与其態度」『飲冰室文集』文集之三十、20-21頁。
（21）　進歩党の成立大会においても、袁の卓越した政治能力を承認しつつ、他方、袁に対する監督の必要を強調したことについて、張朋園『梁啓超与民国政治』食貨出版社、1978年、67頁、を参照。
（22）　以下各政党については主に、謝彬『民国政党史』1925年（文星書店版、1962年）、楊幼炯『中国政党史』商務印書館、1963年（1979年新版）、王覚源『中国党派史』正中書局、1983年、朱建華・宋春主編『中国近現代政党史』黒竜江人民出版社、1984年、に拠っている。
（23）　王覚源、前掲、80頁。
（24）　理由は未詳であるが、王覚源のみが、章が共和党の首領になれなかったことへの反発であると説明して

いる。王覚源、同上、1040頁。

(25) 謝彬、前掲、44頁。

(26) 民主党の成立の時点には異同がある。朱建華編は、8月27日、王は9月27日、謝・楊は10月、また胡象賢は10月27日をとる（胡象賢『民初国会之深源与演進及其失敗原因的分析研究』学海出版社、1983年、117-8頁)。民主党は徐々に拡大していったと考えられる。8月に国民協会と合併し（丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』上海人民出版社、1983年、649頁)、民主党を名乗り、共和統一党など4党と合併し、最終的に梁の帰国を待って、10月に正式成立大会を開いたと推測される。

(27) 丁文江、前掲、549頁。

(28) 丁文江、同上、613、620頁。

(29) 梁啓超「与嫻児書」、丁文江、同上、655頁。

(30) 丁文江、同上、655頁。

(31) 梁啓超「与嫻児書」、丁文江、同上、656頁。

(32) 梁啓超「与嫻児書」、丁文江、同上、656頁。

(33) 楊幼炯、前掲、61頁。

(34) 梁啓超「与嫻児書」、丁文江、同上、668頁。

(35) 張朋園「進歩党之結合与権力分配」『中華民国史料研究中心十周年紀念論文集』中華民国史料研究中心、1979年、292頁。

(36) 黄遠生「新年発筆」『遠生遺著』第2巻、文星書店、1962年、300頁。

(37) 謝彬、前掲、54頁。

(38) 楊幼炯、前掲、68頁。

(39) 王覚源、前掲、114頁。

(40) 楊幼炯、前掲、71-3頁。

(41) 梁啓超「中国立国大方針」前掲、64頁。

(42) 梁啓超「莅民主党歓迎会演説辞」『飲冰室文集』文集之二十九、14-22頁。

(43) 例えば、①当排除偽政党、②加以卑劣手段妨他党之行動、③宜妨小党分裂（「中国立国大方針」72-3頁)。あるいは、①忌党内分裂、②万事須公開、③党員勿自居於客体、④党員戒自由行動、⑤党議勿争小節（「共和党与其態度」24-27頁)。またあるいは、①政党者結合之団体也、②政党者任意結合之団体也、③政党者継続結合的也、④政党者相対結合的団体也、⑤政党者為協同活動者也、⑥政党者有一貫之意見者也、⑦政党之意見以公共利害為基礎、⑧政党用光明之手段以求占優勢於政界（「敬告政党及政党員」『飲冰室文集』文集之三十一、8頁。)

(44) 梁啓超「敬告政党及政党員」『飲冰室文集』文集之三十一、8頁。

(45) 梁啓超、同上、13頁。

(46) 梁啓超「中国立国大方針」前掲、67頁。

(47) 梁啓超、同上、73頁。

(48) 梁啓超「共和党之地位与其態度」前掲、23頁。

(49) 例えば「進歩党成立宣言」において次のように語られている。「若小党林立、無論如党、皆不能以独力制多数、則必縁感情以生離合、運権術以行操縦或遷就提携、而政策不成系統、或要挾結合、而政局起動揺」（李守孔編『民初之国会』正中書局、1977年、213頁)。

(50) 梁啓超「敬告政党及政党員」前掲、7頁。

(51) S.ハンチントン、内山秀男訳『変革期社会の政治秩序』サイマル出版会、1968年、439-447頁。

(52) S.ハンチントン、同上、445頁。

(53) 梁啓超「中国立国大方針」前掲、76頁。

(54) 「進歩党成立宣言」、李守孔編『民初之国会』正中書局、1977年、213頁。

(55) 梁啓超「敬告政党及政党員」前掲、7頁。

(56) 例えば、憲法討論会・国事維持会・民憲党など進歩党は国民党との超党派集団を議会内に結成すること

ができた。張朋園、前掲、1978年、53頁。

(57) 梁啓超「読中華民国大総統選挙法」『飲冰室文集』文集之二十、58-59頁。